

プロローグ：なぜカミハチなのか？

Prologue : Why do we work in KAMIHACHI?

わたしたちは、みんなで、この街のミライの姿を描ききってみることにしました。とりわけ、ビジョンやコンセプトを含む、“デザイン”という形にまとめてみることにしました。「デザインとは、現在の状態を、より好ましいものに変えるべく行為の道筋を考案すること」。これはノーベル賞経営学者のハーバート・サイモンの言葉です（サイモン、1969）

また、認知科学では、デザインすることを人間のあり方の一つと読み解いて、こう述べています。人は「与えられた世界を生きるのではなく、自分たちのための意味や役割を与え、世界を任意に操作可能にしようとする」、と（有元・岡部、2008）。イノベーションの文脈で語られた言説にも至言があります。「デザインは意味を刷新し、意味は市場での差異をもたらす。モノに意味を与えることでイノベーションが興る。デザインは、それによってビジョンを提案して、ニーズを先回りする。人はほとんどの場合、現物を見せない限り自分が何を望んでいるのかわからない」（ベルガンティ、2016）。

だからこそ、コミュニティデザイン（1980年代の住民参加の公共空間設計のこと。転じて、地域住民が自らの活動なども設計すること）も、ソーシャルデザイン（社会課題を契機に、社会制度や公共インフラを再考し再構築すること。市民を動員して解決に向かうとする活動そのものも含む）も、複雑化する現代社会で、特定分野の専門家では解決策が見いだせないことに適応するために、「行為の道筋を」「自分たちのために」自らデザインし、「市場で」「意味を刷新」しようとしてきました。デザイン活動の軸に、“**集合知**”としての意味あいが含まれているゆえんです。

かつての社会的合意形成が、進展のために利害関係者への説得に力点が置かれていた同意要求的な活動であったことに比して、複雑で不確かな社会状況の現在では、「集合知」を活用するまちづくりワークショップや社会構成主義の浸透もあり、合意形成を「異質な意見の関係づけによる調和の生成」と捉える定義が提唱されたり、「エディトリアルリティ<編集された現実>」という言葉が生まれたりしています（今田、2011）。

カミハチミライデザインは、「編集された現実」としての、このエリアのみなさんのミライに関する思考の集大成、集合知で、自らをデザインしていく“セルフな都心デザイン活動”のスタートアップでもあります。



広島城蔵

明治期の広島は、旧西国街道に並行する広島城のお堀、八丁堀をそのまま大通りにするという、かっこうの目抜きを誕生させておきながら、川的生活文化として河川交通も残しつつ、急速な発展をし、また昭和期のモータリゼーションの渦中にあっても、路面電車と共存するという独特の都心を形成してきました。“均衡ある発展”の都市間競争にあっては、“無限の拡張”を夢見て、開発の主戦場が郊外へと伸び、やがて職と住を分離する、宅地開発のグレイター戦略が取られるようになりました。活力ある多くの都市と同じように、ここ広島でも、基幹大学や空港の郊外移転が進み、まちは拡張を果たしました。

そんな今、都心には**新たな役割**が与えられつつあります。職住分離の通勤都市建設、住む人の充足という役割から、広域経済圏におけるリーダーシップある都市がもつべき“都市の顔”を表象するという役割です。都心は、ただ都市の経済活動の集積地であるだけでなく、すなわち利便性をもって住民の生活上の充足という都市機能だけを果たすのではなく、広域経済圏（リージョン）全体（たとえば、中国地方）のブランドを左右する“象徴”として、躍動することが求められています。

わたしたち都心自身が「どうなりたいか」以上に、「どう役目を果たしてくれるのか」に応える必要があります。都心再生は、単にドーナツ化した間隙を用いてコンパクトシティという利便性を満たすことにとどまらない、躍動性が求められているというわけです。

紙屋町と八丁堀はともに広島を代表する都心です。この2つの街は、戦後長らく“切磋琢磨”しながら、広島の都市経済を象徴してきました。経済統計上は2つに分けて計測されているものの、実態としては回遊する来街者は多く、昨今のビッグデータ解析からも、相互に関わりあって支えあっていることがわかるようになってきました。まちづくりの視点からも、独立した個々の活動がもたらすものより、“共創”することによって生み出される価値の増大のほうが効果が大きいことが、多数の他都市の事例によっても報告されています。

「まちづくり」は、サンフランシスコ講和条約の時代まで遡る伝統的な用語ですが、その第1世代が、行政主導と新しい生活の確立を目的としていたことに比して、1980年代の第2世代は、住民参加、都市計画、1990年代の第3世代は、市民共同、市民による活動づくりをテーマにしてきました（竹内、2017）。なぞらえるなら、行政、住民、市民と主役が交代してきた現在は、しばしば、アクター、プレイヤー、という言葉が用いられています。これをまちづくり第4世代と呼ぶのであれば、それは、21世紀の都心の潮流をなしている「エリアマネジメント」もまた、この文脈に収まるのかもしれませんが。まちづくりは、住民、市民に加えて、さまざまなアクターがさまざまなステーク（立場や利害）を媒介し活用しながら、ネットワークとしてその活動の容態をつくりあげる、オープン性の高いものを主流としつつあるようです。

エリアマネジメントを、国土交通省は「地域における良好な環境や地域の価値を維持・向上させるための、住民・事業主・地権者等による主体的な取り組み」と定義し、そ



れを推奨しています。わたしたちもまた「エリアマネジメント」活動の一環として、現実を主体的に、地域の環境や価値を維持・向上させるデザイン活動を行ってきたところです。とくに、ミライデザイン活動の苗床となった、2019年からの紙屋町八丁堀エリアマネジメント実践勉強会を母体とするさまざまな活動は、カミハチの協働的な活動でこそ、現実をデザインしていくことができると企図したものでした。「行為の道筋を」「ニーズを先回りして」、「現物を見せ」てみた二度の**社会実験**や、**ワークショップ**形式で取り組んだビジョン分科会、ストリートを会場とする実験的な**市民フォーラム**を含む4度のカミハチフォーラムなど、果敢に“現実の編集”に取り組んできました。これらに貫く“**アクション・ファースト**”、“**アクション・ベースド・ビジョン**”の志向は、成果も結果も大切なことであると同時に、そのエリアマネジメントの「プロセスを味わうこと」も重要であるとして一意に規範化してきたところでした。この教えをいただいた、全国エリアマネジメントネットワーク副会長、保井美樹先生の急逝は残念でありませんが、ご冥福をお祈りしつつ、この教えを必ず守っていききたいと思います。

著名な紛争解決ファシリテーター、アダム・カヘンはこう述べています。「わたしたちが**解決策の一部でないなら、それは問題の一部のほうだ**ということである。しかし、**問題の一部でなければ、真の解決策の一部にはなることはできない**」（カヘン、2016）。

わたしたちこそがカミハチのエリアに問題をもたらしているのだ、と自己理解しつつ、しかし、だからこそ解決策の一部になることができるのだ、と胸を張って、この活動のはじまりをつくるミライデザインを、社会という俎上に上げたいと思います。

